

〈葵上〉の結末のことなど

西村 聡

狂言の〈梟〉や〈くさびら〉では、山伏の登場や祈祷の場面に能〈葵上〉の詞章を引き、横川の小型像を利用したパロディ（日本古典文学大系『狂言集下』）であることが、容易に察知できるように作られている。両狂言の山伏たちは、共に加持に失敗して退散するが、それが〈葵上〉のパロディであるためには、〈葵上〉の小聖は加持に成功し、彼が唱えた不動明王の偈文のとおり、悪霊は大いなる知恵を得て即身成仏を遂げていなければならないであろう。

従来、「キリ」の詞章が〈通盛〉とほぼ同文であることや『源氏物語』の生霊像との違和感から、シテが成仏する〈葵上〉の結末は原形どおりでないとして、「キリ」を〈通盛〉から転用した可能性に言及することは、しばしば行われてきた。最近でも、明るい結末自体を難点とし、後人の付加かとする説を見かける時がある。

その種の議論のように、『源氏物語』の側から享受史の視点で〈葵上〉を取り上げると、両者の隔たりが目につくのは当然である。同じ

六条御息所をシテとする〈野宮〉の、本説への密着度と比べると、〈葵上〉における飛躍は確かに大きい。しかし本説を忠実になぞることが、能の成功を常に保証するわけではないし、『源氏物語』では生霊が葵上を襲い、取り殺すに至っている。その過程を本説どおりにたどり、葵上の死を結末として、どういう成功が得られるであろうか。六条御息所の苦悩やその人間的魅力は、悪鬼の所業を目の当たりにした観客には届きにくく、後味の悪い、恐怖の印象しか残らないと想像される。

〈葵上〉の作者はそういう選択をしなかった。そして『源氏物語』を題材としながらも、六条御息所の怨霊を成仏に導き、行者の効験が最大限に発揮される能であることを骨格とした。そのことによつて、読誦の声に感応するシテの人間性が後場にも確保され、前場の苦悩の表明とも相俟つて、魅力的な主人公の造型に到達している。「葵上」はこのキリがなくて曲が完結しない形であり（表章「作品研究「葵上」」『観世』41-8）、明るい結末ゆえに名作の評価をためらう必要はないと考

える。

〈葵上〉の左大臣家では、横川の小型像を呼ぶ前に、すでに貴僧高僧を招請して、大法秘法の手を尽くさせ、権門挙げて懸命の医療を試みている。それでも効験がないのであるから、最後の切り札として招かれた横川の小型とて、調伏は容易ではなからう。ましてや本説を知る観客にとつて、葵上急死の事実は厳然としてある。期待と不安の入り交じるなか、落ち着き払つた横川の小型が到着し、病勢を見て即座に祈り始める。

そのような横川の小型の扱い方からして、調伏の失敗は作者の選択肢になかつたはずである。犬王所演の近江猿楽の作品において、原作に出ない救済者をことさら横川に住む行者としたからには、狂言の山伏たちのような失態を演じさせるわけには行かない。息詰まる闘争の果てに、怨霊は二度と来襲しないと約束し（つまり葵上は死の危険を逃れたことになる）、それだけでも小型招請のいかはあつたが、続いて怨霊は心を和らげ、ついに成仏を遂げる。

横川の小型が唱えた「聴我説者得大智慧、知我心者即身成仏」なる偈文は、山伏祈祷の常用文句であり（日本古典文学大系『謡曲集上』）、古作に世阿弥が手を入れた（船橋）でも、偈文の功力に引かれてシテはやはり成仏することになつている。一方、〈葵上〉を意識して作られた〈黒塚〉や〈道成寺〉では、鬼女の退散までが山伏・住僧の祈りの成果であ

り、成仏に至らない分、シテの人間性より鬼性が強調されていると見られる。ワキにしても権門に招請された、祈禱の第一人者というわけではない。

したがって、偈文の効験はあらたかに違くないが、それを誰が唱え、誰が聞いても同じ結果になるのではなく、葵上の危機を救った上に、六条御息所の心身まで浄化したのは、偈文を唱えるワキと聞くシテが、最高の組み合わせであったことになる。そういう能が作れるなら、本説との違和感など作者には問題外であり、生霊は怨霊でなければならなかったし、照日の巫女や青女房(車副の女)など、怨霊の透視や後妻打ちの暴発に必要な人物は、躊躇なく仮構して動員した。

霊を口寄せする梓巫女とそれを調伏する修験者は、そのような役割分担で一組になっているのが普通である(『岩波講座能・狂言Ⅵ』は『春日権現験記絵』を例に挙げる)。(葵上)の照日の巫女も、隠れない梓の上手と評され、横川の小聖同様、頼るべき切り札的存在と見なされる。前場で巫女が物の怪の正体つきとめ、後場で小聖が祈り伏せ、成仏に至らしめる。その意味では照日の巫女も加えての、最高の組み合わせと言うべきであろう。

さて六条御息所の怨霊は、梓の呪法に引かれて、照日の巫女の目に姿を現したが、自分では出現の理由を、忘れられない思いをしばらくでも慰めるためであると述べている(3段「サシ」)。忘れられない思いと言えば、破

れ車に象徴される車争いの屈辱を、誰もが思い起こすはずである。実際、以下に繰り返される「人の恨み」は、葵上に対する恨みに相違なく、その恨みを晴らすために、ここまで現れ出たのであると、5段の「クドキ」では明言している。

葵上への恨みが怨霊を発動させ、後妻打ちの振る舞いに及び、鬼形に変化する、という部分は分かりやすく、それが舞台展開の主筋ではあるが、前シテ登場の3段では、恨みは後から添うたもの、思いの根幹には人の世を生きる憂愁があるとされている。他者へ向かう感情を自制できない怨霊には、その前に輪廻を離れぬ人間普遍の悲しみが与えられ、併せて忘れたい物思いの種となった。心の乱れを慰めようと、本説の六条御息所は御禊見物に出、(葵上)の怨霊は梓弓に立ち寄って憂いを語る。

『源氏物語』では「身ひとつのうき嘆き」が自覚されていた。(葵上)の怨霊は、仏教的真理を自省の鏡としつつ、たとえば無常の時の流れは、自らの敗北を決定づけるものとしても、年長ゆえに受け止めてしまう。その結果、勝者葵上への恨みが募り、連れ去ろうとする。照日の巫女が招請される以前に、物の怪の活動は「以つての外」の状態にあったから、葵上の枕元に近寄る怨霊の目的は、恨みを晴らすことを当然、第一義とするが、こうして暴発に至る心の乱れを静かにたどり返し、梓弓での告白を慰めとし得たことも、結末の成仏

と響き合うように思われる。

恨みの原因となった車争いには、シテも地謡も、実は一言も触れていない。犬王所演の際、破れ車の作り物とそれに取り付く青女房が舞台に出(今日の「古式」の演出はこれに基づく)、観客には明確な形が提供された六条御息所の登場は、左大臣家が集った人々の中では照日の巫女一人に見えた幻影であり、それはまた車争いの物語の再現ではなく、屈辱というなら怨霊となった現在も屈辱、そういう悲しみの連鎖につなぎ留められた姿を、新たに描出してみごとである。(金沢大学教授)